

# 相対主義と対峙する文学と文学理論

周 非

## はじめに

- 近代思想史の振り返り

### 一、近代小説の定義の問い直しと思想史における近代小説の位置づけ

- 日本近代文学研究者・田中実の研究によると、近代小説は二種類に分けることができる。
- 村上春樹の「うなぎ説」について
- 近代思想史における二種類の近代小説の位置づけ

### 二、主体の外部を内包する魯迅作品『藤野先生』と『故郷』

- 近代小説の《神髓》の作品およびその読み方の具体例として、日中国語教材でもある、魯迅の名作『藤野先生』と『故郷』を取り上げ、その両作品に関する田中実論と今までの先行研究の違いについて論じる。その違いから近代小説の語りの構造及びその読み方について考える。

#### ①『藤野先生』のプロットからメタ・プロットへ

##### A『藤野先生』をめぐる日中両国の〈読み〉—プロット分析に留まる先行研究批判

- ほとんどの先行研究は、作品のプロットにおける謎を悉く読み落としている。

##### B『藤野先生』のメタ・プロットを考える

- 「だがこの時この場所で私の考えは変わった」の意味をめぐって

#### ②『故郷』のプロットからメタ・プロットへ

##### A末尾の別次元の「希望」

- 「手製の偶像に過ぎぬ」「希望」と「地上の道のような」「希望」との違いについて

##### B改めて作品のメタ・プロットを考える

- 『故郷』はほとんどの先行研究で理解されるような、「行動」しなかった「私」から、「行動」しなければならないと認識する「私」になった話ではないのである。

### 三、周回遅れの近代文学研究と次の時代を拓く「第三項」論

- 近代文学研究の現状
- 「第三項」論が文学研究の次の時代を拓くと考える理由

## 終わりに

- 近代小説の《神髓》を読み取るためには、世界観認識の転換が要求されている。